

<文献紹介>細田浩著 『ヴィエント 風の森から』

URUSHIBARA-YOSHINO, Kazuko / 漆原, 和子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

41

(開始ページ / Start Page)

62

(終了ページ / End Page)

63

(発行年 / Year)

2009-03-10

日的な問題であるという紹介をしているが、1960年代、1970年代から報告されてきている問題である。むしろ、21世紀にそれ以前に比べて質的にどう変化してきているのか紹介して欲しい。

第10章は昨今の環境保全の展開がどうなっているのか、筆者が最も興味を引かれた章である。1. 農林業の多面的機能と棚田の保全では、図2はこうも関東地方の山間部の耕作放棄地率が高いのかと驚かされる。(4)棚田の保全では、棚田オーナー制度はいつ頃始まり、今も問題なく実施されているのか、年代を入れて記述してほしいかった。2. 環境運動の地域的展開では、これまでの運動に力点をおいている。1990年代以降、市民の意識も変化し、行動力も増してきたと思う。この項もまた21世紀の現状と課題を示して欲しいと願う。3. 環境行政と市民参加の項では、彦根市の実例がでていて、現場に立脚した記述があるのは有益である。(3)新たな生活空間の編成と環境管理ではNPOの設立が1996年とある。2000年以降のNPOの活動や、その後の問題点など、具体例を挙げて、詳しく紹介

していただきたいかった。4. 地球温暖化問題への対応の項でやっと21世紀の動きがわかる記述がでてくる。2007年IPCCのノーベル平和賞受賞には、日本人も何人か貢献したことが評価されたが、その評価の程度は、世界の環境研究における日本の水準からみて不十分であったと思う。国際的な課題に対する交渉の場における日本の発言の重みにも関連するので、日本の環境研究が正当に評価されることが21世紀の課題の一つである。このような環境外交についても述べられていると良かった。

環境問題に関しての率直な感想は、既存の図表を示すのではなく、もう少し新しいデータで論じてほしいことと、たとえ日本の問題であろうと、国際的な視点に立って問題点を指摘する視点をもっと欲しいことである。また10人の執筆者をまとめるのは大変と思うが、編者らの方針を明確に執筆者に伝え、共通の視点に立って本としてまとめることが必要ではないだろうか。

(法政大学 漆原和子)

## 【文献紹介】

細田 浩著 (2008)

『ヴェント 風の森から』中央公論事業出版, 211頁

久々に心躍る本にめぐり合った気がする。面白い本に出会うと、一晩で読んでしまう習慣のある筆者は、この本を楽しみながら、少しずつ読もうと決めた。この本のはじめには、毎月の詩と、なんと素敵な毎月の写真が、まるで季語のごとくに添えられている。著者は「なかなかの趣味人だ」と、人づてに聞いてはいたのだが、本のはじめにある詩と写真で、すっかり著者の世界に引き込まれてしまった。本の内容ははじめのフォト・ポエムからプロローグ、第1章 森のミュージアム・ヴェントをつくる、第2章 天と地の間に人がいた、第3章 土地に根ざして、第4章 風と森の研究、第5章 ヴェントを超えて、エピローグとなっている。全体は、詩とエッセイと地理的記述に分けられる。詩とエッセイについては、筆者が批評できる範囲を超えているので、この部分は文芸評論家におまかせしたい。

地理学の立場から、特に興味を引かれる点は、自分の住んでいる場が都市化とともに変化していく様子が記述されていることである。筆者はちょうど著者と世代を同一にするので、時間軸に沿って住んでいる側に立って、自分の周囲の環境の変化がたどれるよう細かく記述されていることに感心した。この点から、特に第3章 土地に根ざして、と、第4章 風と森の研究を紹介する。

第3章は著者の地元である埼玉県伊奈町において周囲の景観や自宅の平地林がどのように変わっていったのか記されている。自宅の記憶に基づく図4が、良く

生活を表している。今は、望んでもこのような図をかける家屋が存在しない。この点が極めて貴重であると考え。地理学の重要な点は、忠実に事象を記述することであり、それが時代性を持つことである。その点、生活経験に基づいた記述は、母屋の背後の裏山と称する平地林が生活に重要な役割を担っていたことを良く示している。ソダ木、落葉は燃料や、肥料にし、灰はクレンザー代わりに用いたとある。1960年代末に茅葺き屋根から現代風の家へ建て替えられたという。伊奈町に限らず、日本全体の傾向だったと、今にして思う。いや、これは世界の時代の流れだったのかもしれない。北海沿岸で、1960年代には沢山あったという草屋根の農家を探しにでかけた。1980年代末2日間車を走らせたことがある。しかし、もう既に草屋根の農家はなく、昔の農家をまねた草屋根のレストランが一軒あるのみだった。北ドイツでも、日本と同じことが起こっていたのではないかと思う。

伊奈町の地形は沖積低地と、洪積台地からなり、その海拔高度の差は高々4~5mで、最大10mであるらしい。1970年代から急速にベッドタウン化していく時に、沖積低地の土地条件の悪い地域から宅地化が進んでいくとあるのは興味深い。伊奈町町史のための調査は、参考文献から推定すると、おそらく1990年代におこなわれたと思われるが、台地の縁に存在したはずの湧水の確認でもあったと書かれている。著者自身の記憶から、神が宿るはずの湧水が排水路と化している

姿や、あったはずの池が埋め立てられてしまっている姿を詳しく記述している。この部分は、読者に現実を突きつけているようでもあり、胸をえぐられる思いである。森と泉は密接に関連しているものであり、我々の魂の源でもある。開発という名のもとに便利さを求めた我々は自然の持つ神秘性をも壊すほど改変をおこなっていると著者は述べたいのだと思う。そして、泉の復活は環境を考える際の一つのシンボルなのであると著者は結んでいる。

第4章では、伊奈町の地形についての説明が再びあり、1970年代からの急速な開発と地形の改変で、台地と低地の境界が不明瞭になったところが多いという。著者は2003年には町に対して、自然環境審議会の代表として、平地林と貴重な自然を残すよう、意見書を提出したとあり、行動の人でもある。この章で最も興味深いのは、昭和41年(1966)と平成7年(1995)の伊奈町の緑地の比較である。緑地の減少は無線山の林と、個人の屋敷林が減少したためとしている。別の章で、著者自身が自宅の平地林をいかにして生かすかを考えた結果、誰にでも林を楽しんでもらうためにレストランを開設することを思いついたとある。こうでもしなければ、おしよせてくる宅地化と都市化した住宅との近接地域で、林地を維持していくことが難しいのだと思われる。

この章の中で、平地林の中の住人ならではの観察が光る。特に、1940年代から80年代を経て、2006年に至る林相の変化である。1980年ころにはアカマツが枯れ、1998年にはコナラが枯れ、1999年にはスギ、ケヤキ、コナラが枯れたとある。筆者も同じころ院生や学生達

とスギの衰退度の調査をしていた。1999年から2002年にかけて多くの神社や屋敷で、枯れた木が倒れて人に怪我をさせては困るので切ったということを知った。従って、筆者らの結果(漆原他、2004 季刊地理 56巻 2号)では、切られて切り株のみ残るスギを、衰退度6とした。著者の平地林では、スギばかりでなく、他の樹種も枯死していることから、筆者にはこれが単に自然更新の姿だとは思えない。

1960～1970年代までの大気汚染と、その後もSO<sub>x</sub>の高濃度はすべての樹種に影響したはずであり、著者の平地林にもダメージを与えたと筆者は考える。筆者らの調査は地上から見上げて観察するので、スギに限定した。しかし、ケヤキは樹冠の中心部から枯れていくので、地上からの観察では分かりにくいと報告している論文があり、ケヤキを調査対象とすることをあきらめたいきさつがある。著者の平地林のケヤキもコナラもスギも枯れた年代があまりにも良く関東平野の北西部の傾向に一致している。著者の平地林という一定点での、長期間にわたる観察は、実に貴重なデータを我々に提供している。今後、この平地林がシラカシ林に遷移するであろうとする著者の予想であるが、これは、環境の劣化に強い樹種であるとする観点からだろうか。または、地球の温暖化に伴って、常緑広葉樹が優先すると考えるからだろうか。著者に続く次世代に、20年後、30年後のリポートをしていただきたい気がする。

ともあれ、60年間の平地林の記録と、伊奈町の変化の記録を世に提示していただきありがとうございますと申し上げます。著者の鋭い観察眼を持った生き方に、心から拍手を送りたい。  
(法政大学 漆原和子)